

源流にかえって

同志社におけるキリスト教主義教育について

竹 中 正 夫

やがて一〇〇年を迎えようとしている同志社にとって、その創立当初の源流にさかのぼって同志社におけるキリスト教主義教育について考えてみたいと思う。同志社も一つの集団組織体であって、歴史の中でそれぞれの時代にあつてその要請とチャレンジの下に適合して今日に至っている。どの集団にもそれを維持・発展させようとする集団の本能的欲求があり、同志社も決して例外ではない。創立者の立学の本能的欲求が口となえながらも、それがお題目になったり、現在の制度や組織の維持・発展のために手段として用いられることがしばしばある。組織が生き生きとした発展をなすためには、その組織と精神との間に動的な緊張関係のあることが必要である。組織は一たび設けられるとそれを維持・発展させようとする自然的な本能をもち、それが自己目的となる。そこで必要なことは、その組織が設立された本来の目的と精神に立ち帰って、その現状を検討し、未来への軌道修正や計画をしてゆくことである。宗教改革は、キリスト教の歴史において、その源流にたち帰って、軌道修正をしていった一つの例であつた。同志社も一〇〇年を迎えるにあたって、ま

ず校祖新島が同志社を設立するにあたって何を目ざしたのか、を再吟味することによって同志社のキリスト教主義教育の再把握の一助としたいと思う。

射利求名を排す

同志社大学設立のために文字どおり東奔西走していた新島が明治十五年十一月七日に認めた「同志社大学設立之主意之骨案」というものがある。これは、美濃野紙十二枚の文稿であり、やはりそのころに記された「同志社学校設立の由来」と題する一文と共に、のちの「同志社設立の始末」の草案と思われる。前者は、同志社大学を設立する新島の「理念」を語り、後者は設立に至った「経過」を述べている。「同志社設立の旨意」が形成されるようになったと考えられる。

その骨案の冒頭にこうのべられている。

「維新以来時勢之変遷ヲ出シ来リ従来之漢学風ヲ一変シ洋学ヲ採

用シテヨリ往々便宜ト智術ノミヲ主張シ遂ニ只利ヲ是レ求ムルノ弊風ヲ惹起シ学者輩中多クハ其ノ本ヲ探ラズ其ノ末ニ趨リ其ノ基ヲ固セズ徒ニ速成ヲ期シ甚シキニ至リテハ糊口ヲ以テ人間第一ノ急務トナシ世ノ先導者ヲ以テ自任スル身分ナカラム射利求名ヲ以テ学問ノ大目的トシ安逸ヲ得ルコソ人間最大ノ幸福ナリト誤認シ汲々自ラ之ヲ求ムルノミナラス門弟ニ向ヒ世人ニ向ヒ喋々之ヲ訓誨スルヲ以テ恥辱トセザルニ至リ随テ其ノ余波社会ニ伝及シ人之徳義ヲ擲棄シ唯利ヲ是レ争フノ弊風ヲ醸シ来リ社会ヲシテ浮薄ニ流レ腐敗ニ趣カシムルノ害日一日ヨリ甚シカラシム」①

明治十五年といえは欧化主義の最中であつた。国をあげて西歐の進んだ技術文明を導入することに懸命であつたころである。この年に伊藤博文は憲法取調のために歐洲に旅し、井上馨は条約改正のために専念するようになってゐる。一度流れが変わると猫も杓子（しゃやくし）もそれに追従するのがこの国の習わしである。つぎの一文は当時の状況を興味深く描写してゐる。

「宗教上より云へば耶蘇教の隆昌を招き、而して風俗上より云へばバタ臭きもの全盛を極め、丁稚小僧はその唇頭より端唄、都々逸の代りに、オールライト、グッドバイ等生嚼りの洋語を漏らし、英学先生は鞍馬天狗の如く全国中を翱翔し、細君令嬢は丸鬘、銀杏返しを廃し、振袖、裾模様を棄ててその束髪は馬糞に似たり。其洋服は鶯の如しと評せらるるをも顧着せず、三家村裏の破壁にも石版摺の色彩絵掲げられ、一厘五毛の切鉛を売る老爺まで、楽隊然たる太鼓を叩いて西洋パンを嚮ぐに至り、其の奇々妙々なる筆紙の得て及ぶ所に非ず。蓋し欧化主義の時代たる」②

新島はこの風潮を憂えた。十年にわたる海外の研鑽において、西歐の文明の進んでいることを新島はよく知っていた。だから、日本が開国、近代日本を形成するにあつたつて、西洋の文明を摂取することを新島はいささかも否定しなかつた。彼が憂えたのは、西洋文明の導入の姿勢であつた。何の目的のために文明開化をなすかを彼は問うた。

さきの「骨案」では、「射利求名」が学問の大目的となり、「安逸」を得ることが人間最大の幸福であると誤認されていることが指摘されている。日本の近代化の過程で、西洋文明を導入するにあつて用いられたスローガンは、和魂洋才であつたことがしばしば指摘されているが、和魂が何を意味したかは、きわめて興深い問題である。理念的な和魂の位置づけについては、さまざま考えが挙げられようが、実践的な倫理としては、「立身出世・富国強兵」という二つの柱が支配的であつた。新島も函館を出る前に

武士の思 立田の山の紅葉

にしきぎざれば など帰るべき

とうたつてゐる。功成り、名利げて故郷に帰ることが男子の本懐であると考えられていた。個人倫理においては、私利・私欲の達成が中心となつたのに対し、社会倫理においては、富国強兵が近代日本の旗頭となつた。

明治九年、創立まもない同志社に有意な人材を輸血した熊本バンドの背景には、横井小楠の思想のあつたことはすでに指摘されているが、小楠は、慶応二年二人の甥を米國に研鑽のために送るにあつたつて、つぎの詩を送つてゐる。

「明堯舜孔子之道

尽西洋器械之術

何止富国何止強兵

布大義於四海而已」

ここで注目すべきことは、「何ぞ富国に止らん、何ぞ強兵に止らん」として、それらが至上目的ではなく、広く大義を求め、それを世界に布くことがうたわれていることである。

新島は、さきの「骨案」を認めた年の翌年、全十三頁からなる「同志社大校設立旨趣」を印刷し、小冊子として各地の有力者たちに配布している。この年の新島の動静をみると、多病の身に寧日なく、大学の設立と教会の伝道のために各地を歴訪している。三月には米原・関ヶ原・大垣・長浜をめぐり、四月には大阪、五月には東京・安中、七月には神戸、八月には大津から石川県と福井県の各地を訪ね、十月には岡山・高梁・笠岡を、十二月には大津・八幡・八日市・彦根とまことにきびしいスケジュールの日々が続いている。この年の暮、新島は遊獵のため琵琶湖に赴いている。十二月三十日はちょうど日曜であり、彼は旅館にとどまって聖日を守り、静かに聖書を読んだ。その晩彼は日本の教化をおもて眠られない思いで朝を迎え、高知にいた自由民権論者板垣退助にあて長文の一書をしたため、つぎのようにいっている。

「小生は多年耶蘇教を信じ且該教皇張を以一生の志願となし居候間喋々該教を説くは決して文化を進むるの道具と見做すに非らず、即ち文化の之によらざれば興らざるを信するなり、是乃ち文化の源泉なり、故に生は此罪惡汚穢に染みたる人類の心をして一

洗せしめ我東洋に新民を隆興せしめんと存候、新民は乃ち新心を抱く者なり、人にして此新心なければ西洋百般の技芸何の益する所あらん、學術なり民権なり政治なり、総て私慾私心の奴隸となり早晩腐敗に趣くは史上歴々見るべきなり」

また言葉をつないで、

「閣下にして自ら新心を得新民とならるるならば、実に閣下の大幸、邦家の福祉と存候、万一閣下にして新民となるを好まざれば願くば小生の語を朋友子孫に伝へ百年の後小生の語の虚ならざるを証せしめは幸甚、頓首々々、客舎残燈下に記す」と結んでい

る。^④ 板垣はこれよりさき前年四月岐阜で刺客におそわれた。新島は直ちに大津港で板垣を迎え、京都まで汽車で同行し、さらに三日おいて、板垣を大阪に見舞っている。新島は政治家として自由民権運動に参加しなかった。^⑤しかし、彼は、日本の近代化において重要な役割を果たすのが人民であり、それは、従来の貴族・士族などの支配階層の下で一個の人間としての権利を認められていなかった人々であった。いわば、彼らは、「暗きに座する民」であった。^⑥

新島の同志社創立の眼目は、この新民の教育であり、それには、新心を啓発するということであった。新民にして新心を欠くとき、いかに西洋百般の技芸に秀でたとしても、私欲私心の奴隸となり、いたずらに名利を追って他者をひしぎ、富国強兵に走って他国を圧迫する結果となることを新島は見ぬいていた。日本の将来をおもい夜もねむれず、曙の残燈の下に記した右の一文は、新島の心情をおもくあらわしており、その後の日本の百年の歴史のあとをふり返って

みると、それがいかにかを得た予言であったかを知ることができるのである。

新心なければ新民なし

これよりさき、明治八年六月、新島は京都に居住し学校を開くことを決し、父に手紙を送り、転籍を依頼している。月末には、再度催促し、「寄留にては不都合の事も有之候間是非に住所を變へ土族より平民に相成候共不苦何卒送籍状を御送被下私儀京師之人別に入候様仕度候」とのべ、自ら土族より平民となって平民の教育にあたることをのべている。①

自ら平民となって平民の教育をなそうとした新島は、キリスト教主義をその教育の基とした。新島が「新心なくして新民なし」という確信をもつに至ったのはいかなる理由によるのであろうか。彼は、一方では、外面的な西洋文明を利用しようとする軽薄な態度を批判すると共に、他方では、在来の封建的な考え方に追従することができなかった。前者においては、合理主義が強調されるが、利己主義が中心となり、後者においては、日本の伝統は重んぜられるが、個人の人格は集団に隷属されていった。近代日本においては、両者はきわめて奇妙な形で結合しており、「富国強兵」の中で「立身出世」が位置づけられ、それがやがては「滅死報公」となっている。奇異なく受け入れられる連続性がそこにあった。

新島がここでいう新心というのは、旧来の日本的な価値観に新しい衣をまとわせようとする国民主義でもなかった。新島にとって新心とは、

聖書に基づくキリスト教の精神であった。十年にわたってニューヨークで研鑽し、また欧米の教育事情をつぶさに視察して新島が学んだ一つの確信は、それらの先進西欧諸国においては、人民の教育が盛んであり、そして、教育はキリスト教の精神に基づいてなされているということであった。すべての人は神によって創られ、生まれながらにして独自の人格をもち、一人一人は神の力に内宿し、良心と理性を与えられており、それをめざめさせ、知識をみがき、良心をめざめさせ、智徳を兼備した人格として、神と隣人に奉仕する自立自治の人民の育成が新島のねがいであった。

明治二十一年に公表された「同志社大学設立の旨意」には、従来まで文明の「根本」とか「源頭」とかいう表現を用いていたものはつきりと基督教という表現であらわしている。

「而して斯くの如き品行と精神とを養成するは、決して区々たる理論、区々たる検束法の能く為す所に非ず、実に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信ず、是れ基督教主義を以て、我が同志社大学徳育の基本と為す所以ん、而して此の教育を施さんが為めに同志社大学を設立せんと欲する所以なり。」

さきあげた明治十五年の「骨案」において新島は、自立自助の人民を教育するため、民資を集めて関西に私立大学を創立することをうたっている。その大学とは、総合大学であり、キリスト教の徳育を基としたリベラル・アーツ・カレッジであった。本来は、宗教・哲学・理学・文学・医学の諸学部を設けることが理想であるが、実際上は困難なので宗教兼哲学、医学、法学の三学部をおくことを提示している。宗教および哲学の部を設ける理由はつぎのよう

にのべられている。

「一、宗教並ニ哲学ヲ授クルノ目的ハ克ク造化ノ妙理ト人間ノ要道トヲ探ラシメ又明ニ事物ノ奥蘊ヲ究メシメ学者ヲシテ真理ノ奥妙ヲ味ヒ志操世界ニ逍遙セシメ進ンデハ同胞ノ福祉ヲ計リ邦家ノ進歩ヲ望ミ退イテハ一身ノ徳義ヲ修メ本心ヲ磨キ真理ニ基キテ動止シ真理ト共ニ生息シ弱キヲ憐ミ暴ヲ制シ曲レルヲ矯メ正キヲ賛ケ百折不撓ノ鉄腸ヲ鍊リ金石モ徹スヘキ精神ヲ養ヒ普ク同胞ノ幸福ヲ希図シ共ニ進テ文化ノ最高点ニ至ラン事ヲ要スルニアルナリ」⑥

総合大学におけるキリスト教

「骨案」が起草されたときは、まだ基督教に對する反対が強くとりわけ、古い伝統の強い京都において基督教主義の大学を設立しようというような計画は、蘇峰の表現によれば、「牛に向つて赤毛布を示す如く」、「伝染病院の看板を掲げて旅館を開くが如きものであった」⑦そこで、「骨案」では、基督教という表現は用いられず、「宗教並ニ哲学」と広い表現がなされている。基督教主義のこゝとが最も明瞭に出てくるのは明治二十一年の「同志社大学設立の旨意」であり、それは、

「教育は……上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道徳に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり」という表現をとっている。このような表現についての事情があったにせよ、ここでとくに指摘されるべきことは、同志社大学において「宗教および哲学」あるいは「神学」が考究されるとき、

それは、狹義の伝道者養成のためではなく、また外国の伝道会社に對する義理を果たすためでもなく、広くかつ深く真理を学び、真理に基づいて生きる鍊達の人民を輩出するためであった。

新島はそのようなキリスト教の教育をつぶさにニューイングランドにおいて受けた。それは、総合大学におけるお互いの自由を尊重しながら営まれるキリスト教精神による人格形成に外ならなかった。同志社の第一回の卒業式において、俊才といわれた山崎為徳は、「日本学術論」というテーマの下に、英語で卒業演説をなし、これからの学問のあり方を問い、キリスト教による真理と徳性を媒介とした自由主義的綜合大学を示唆し、その範をハーバードやイェールの諸大学に見いだしているのは、新島の志をうけついでものとして注目されよう。

むすび

同志社は、キリスト教の伝道のために教育を手段として用うるというミッション・スクールではない。同志社は外国のミッション・ボードの経営によつてキリスト教の宣伝をするミッション・スクールではない。同志社のめざす教育は、一国の良心というべき、知識あり、品行ある人民の教育であり、それをキリスト教の精神に根ざして行なおうとするものである。

このことは、決して偶然的にまたは安易におきたものではなかった。新島は、片一方では、同志社をキリスト教の伝道師養成の機関としようとする宣教師側の主張と、他方では、同志社は「耶蘇会社の奴隸」であつて新島は「不忠不義の売国者」であるとするとする保守的

な人々の誹謗の間にあって苦惱の日々を耐え、祈りながらキリスト教主義を基本とする大学の設立をめざしたのである。今日では新憲法の下に信教の自由が保証され、基督教主義の教育をする権利が私学には保証されているが、この時代の状況の中で新島のめざした人民の教育をキリスト教の精神に基づいてなすには、きわめて困難な問題が山積している。その当面の対策に心を煩わせることも大切であるが、源流にたち帰って、立学の精神の基盤であるキリスト教の精神を新島がどうとらえていたかを今一度新しく把握しなおすことが大切であるように思う。そこから、同志社のつぎの百年のヴィジョンも生まれてくるにちがいない。

おわりに、新島が死ぬ一週間前に、同志社の学生の一人、横田安止にあてた手紙の一節を引用して結びに代えたい。小手先の細工と、ヌラヌラしたナマコのような風潮が多くなってきた昨今、わたしたちをよびますことばであると思うからである。

「何分学校が同志社に限らず、何れにも小刀細工の地に相成て大に困却仕候、殊に我校に小刀細工が当時の通弊ならん、然し生徒の内何となく元氣回復の兆頭出せしは可賀美事と云ふべし、……予は基督教徒に対し、著しき迫害の起り来りて吾人の精神と骨髄迄も一新鍛練せられん事を望む、……吾党の中近眼にして小成に安ずる者多く、又困難に逢はば頓挫し易く、実に大事に当り得ざるべしと大に痛嘆致し居候、大概に申せば悠悠々無頓着に日を送る者多し、何の効能もなくアンビションもなく、アスピレーションもなく、敢為の元氣もなく将来の目的もなくヌラヌラ然たる骨な

きナマコの如き者多し、ナマコも決て馬鹿には出来ず、たたけば固くなるの一奇事あり、此輩は叩く時には固くなり可申か、兎に角校中に元氣は盛に相振候様切望致し居候」^⑩

(大学神学部教授・宗教学・組織神学)

(註)

- ① 「新島先生書簡集 続」 二七九頁
- ② 「植村正久と其の時代」第五卷 二三頁——二四頁
- ③ 今中寛司「肥後実学党の思想——熊本バンドの歴史的背景」同志社大学人文科学研究所編 熊本バンド研究 三三頁以下参照
- ④ 「新島先生書簡集 続」 新島襄先生詳年譜 二〇八頁——二〇九頁
- ⑤ 新島と自由民権派との接触については、和田洋一「新島 襄」 二四二頁以下参照
- ⑥ マタイによる福音書 四ノ一六
- ⑦ 「新島先生書簡集 続」 新島襄先生詳年譜 一一六頁
- ⑧ 「新島先生書簡集 続」 二八五頁
- ⑨ 徳富蘇峰「三代人物史」 四九七頁
- ⑩ 「新島先生書簡集 続」 新島襄先生詳年譜 三九二頁

一 同志社社員の雑感と愚見

——同志社教育に展望を求めて——

武 邦 保

妙なことだが、何か書けるようであつたにはたいへんにむづかしい課題を与えられた感が深い。現代の多様な問題を深刻に受けとめながら、同志社に生かされていることの意義を反省しているものではあるが、そのことについても十分に書く余裕をもたない。ただささやかな体験の中で時折感ずることを述べて責めの幾分かを負いたいと思う。

今日の日本の思想状況からしてそうなっているのかよくわからぬが、現実には提起されている「大学問題」と「キリスト教」の問題とは原理的な時点で不思議にも結びついているように感じられてならない。もちろん、それをわたしなりに解明しようとするならば、近代国家形成の数あるモメントの中の二つのものとして、それらを批判的かつ創造的に位置づけてゆく作業がさらに必要になってくる。

さて、そこで一九七〇年代を迎えてからいよいよ深刻になってゆく非人間化状況を、「現代」のひとつのあらわれだとみてゆくならば、そのような現代から、かの近代国家形成に果たしてきた二つのモメントはどのように評価されていったらよいのだろうか。

最近わたしたちにショッキングな知らせをもたらしたのは、ロー

マクラブがアメリカにその名をはせているM・I・T（マサチューセッツ工科大学）に依頼して調査した「人類の危機」レポートである。それは、一九七〇年までの地球世界の動きをこれから一〇〇年の時間の中にあてはめて、きわめて体系的に分析した生態学的予言でもある。そこから人間に不可欠な空気や水の自然的浄化作用のテンプ、逆にいえば、公害の進化の比率は一〇〇年までのある時点で急激に変わってゆく——つまり加速度的に増大する——ということも覚悟しておかねばならない。現代は、人類が基本的に生きる時点で危機的狀況を突きつけられているとみてよい。

おそらく古代ギリシャの哲人たちは生きることの中で、「幸福とは何か」を論じてアカデミアを形成していたことであろう。そして現代は幸福論の前提となる、まさに「生きること」そのことに、物理的にも哲学的にも考えを向けてゆかなければならないのである。生の不安はとくに若者の行動を規定してきていのように思われる。同志社の、とくに宗教教育がそのことを踏まえて根本的に考えられているかはいまだ疑問である。つまり学者と宗教者の深い関連を全学で反省してみるときだということである。

そのことは、哲学の世界で「実存主義」が市民権を確立し、また

その方法論上からも「存在論」が「認識論」に劣らず高く評価されていることも、あわせて考えてみてよいことだと思ふ。

わたしはこのようなこととの関係で一大変回り道をしたようであるが、いま宗教の問題とアカデミアを考えてゆきたいのである。

二

先日の朝日新聞「こころのページ」に、キリスト教主義大学でなされる神学教育の記事をみたが（五月三日付、同紙二頁）、その末尾で記者はこう述べていた。「……しかし神学教育をめぐるさまざまな問題は『まだ過渡期』である。教会とのかかわり、学問・信仰の自由との関係にまでひろがる問題の底にあるものは、現代において人間とは、宗教とは、の問いかげではなかるうか」と。

ここでわたしは新島襄のあの血脈から吹き出る熱っぽい、かの名言の数々を列挙しようとは思わない。ただ彼が山本覚馬やJ・D・デビス師と共に同志社設立の祈禱会をもってまず英学校を始めたこと、その主要な科目内容には「聖書、西洋歴史、英語、天文学、地質学、人体解剖学、数学」（『同志社九十年小史』五一ページ）などを置いていたことをここで思い返しておきたい。

彼は単科神学校をつくりうとはしなかった。つまり、彼なりに公共の民族共同体（新島によれば「邦家」）と真理を愛する自由で豊かな精神の持主を、封建的桎梏から解放されたところで求めようとしていたのである。

そこで儒教の道徳にかわるキリスト教主義の道徳を教育過程で日本の青年に土着させることをもって、日本の精神的近代化に役立つようとしたのではないだろうか。歴史家も指摘しているように、新

島は必ずしも神学者ではない。また学校経営に苦勞は十分にされたであろうが、今日いうところの専門的な経営者でもない。ただ彼は日本の近代に道義的人格こそすべての自由と独立と自治の基であると論じた教育者であった。レジャー時代の最近では、なお一層みられるような「道義心」のうすい日本民族に近代的市民としての生活と意識を与えるためには、ピューリタニズムの中でさらに培かわれてきた聖書の宗教が、出合いの対象として必要であると彼はすでに一〇〇年前に予言していたのである。

三

よく知られていることではあるが、一八九〇年（明治二十三年）一月二十一日の朝早く、新島が枕もとに妻、門弟たち（八重子、小崎弘道、徳富猪一郎）を呼んで遺言をした中で、「同志社は隆なるに従い、機械的に流るるの恐れあり、切に之を戒慎すべきこと」（魚木忠一「新島襄——人と思想」一七二ページ）とある。それは同志社の教職員学生が「皆精神活力あり真誠の自由を愛」する「人物の養成」（同書）において、もはや人格的、主体的でありえなくなつてゆくことへの戒めであつたらう。

人口の量的増大は、当然のこととして制度組織の再編成に通じてゆく。それは国家レベルのことのみでなく、一学園内のことにてもいわれるだろう。現在わたしの所属する女子大学の中でも制度組織（たとえばカリキュラムや教員組織）の再編成が話題にされている。

それはこの中で学生も教職員もすべての個人がその量にかかわらず、質的に一人の人格としての自由と課せられた作業の効率を機能的に引きあげてゆくことを願う以上、必然のいわゆる「合理化」で

ある。けれども、この合理的制度とその組織の合理的運用という論理が生み落としてくれるものは、官僚的で他律的な「親方日の丸」の思考と、その結果としての国家権力への迎合である。

さて、ここでわたしたちは今一度「同志社」の基底にすえられたキリスト教という宗教的次元の問題（寄附行為第二条）にかえらねばならない。それは、つまりあの明徳館にかかげられた「真理はあなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネによる福音書八・三二b）とのイエスのことばを、わたしたちが現在いかに理解するか、という問題に集約されてもよいことである。

他方ではまた、宗教上の自由、すなわち日本国憲法（第二〇条）との関連でこの問題を前向きに考えることができる。すなわち、その「宗教の自由」の保障は、もっぱら国家公権力からの自由の保障なのである。もちろん法人同志社は教育研究を主たる目的とする団体であって、いわゆる宗教法人法（二条）の規定する「宗教団体」ではない。したがって同志社においてキリスト教の「教義をひろめ、儀式行事を行なう」ということは、そのこと自身が「主たる目的」であるのではなく、むしろその内実において教育と研究を一層精神的活力に満ちさせて、自由の学園をつくり、またそれをもって国家社会、人類世界に大きく寄与しようと志すからにほかならない。

これはひとつの道義であり、社会につくす倫理であるが、少なくともキリスト教主義学園がこの世に存在する理由は、実にこの宗教的深き倫理をきわめて主体的に実践する人間のとりでとして社会を指導するところにある。そこはまたあらゆる非道義性（ひいては不法性）の社会にどこまでも抵抗する自由と精神的活力を内包させた

真理探究の共同体であらねばならない。

さて、そこから「宗教の自由」についてみるならば、それはもはや消極的自由（信じないことの自由）を是認した上での積極的自由（信ずることの自由）をこそ——法形式よりも真理内容をより多く道義的次元で問う——教育・研究共同体としては重く尊重しなければならぬことだと思ふのである。

四

先に、現代という時代状況の、いわば終末の様相の一端を述べた。しかし、それとてもわたしが述べるまでもなく情報社会が解説してくれている。資本と情報は、人間と機械を通して物的生産とそれに見合う心理操作をうみ出してゆく。しかし、そこでこの生産を大局的見地から調整し、人々にそのような判断力を供給する精神的、知的に高い「コントロール・タワー」は今日いまだ見当たらない。ようやく市民団体や大学がどうにかその供給源になっているという状態である。

したがって人類の危機といった否定的情報はいまだ真にまれなのである。またそこでもわたしたちは現代国家の問題（とくに行政権力の心理操作の問題等）を考えなくてはならないが、理性的・倫理的批判の自由よりも、権力本能むきだしの欲求の論理が資本と情報を駆使しながら非理性的、非倫理的な社会を今日みごとに築きつつあるともいわれよう。このような流れに「否」を呼ぶ自由を少なくとも同志社人は「宗教の自由」の理解を媒介としながらも持っているであろう。そこから同志社の教育と、ひいては学問研究の自由なる姿がみられるのである。

キリスト教、つまりは聖書の宗教についても十分に語りえないが、信教の自由を媒介とした、それゆえに国家から自由な教育研究機関としての私立「同志社」はここにある。新島の「同志社大学設立の旨意」中にも、「政府の手に於て設立したる大学」の有益性とは比較されないところで、「自治自立の人民を養成する」特性が彼の願った私立大学の長所でないならばならない、とある。

しかし、今日は国家の教育への介入が公・私を問わず各学園に強くあるため、私立大学の中においても、たとえば「築波大学」に関する国立学校設置法等の一部を改正する法律案には国公立の差を意識する余裕もなく、これを厳しく受けとらなければならない状況に落ち入っている。それは今も述べたように教育をテコとした国家権力の在り方の問題であると同時に、とくに同志社のように、外国人ではなく、愛国の士、新島の呼んだ土着の教育理念が、日本の私立学校の「発展」の中で十分に指導的に果たされていなかったということは、わたしたちの猛省しておかなくてはならないことである。ひるがえって女子大学の現実からその点について若干触れれば、そこでも同志社教育をあらわすリベラル・アーツ・カレッジの姿は厚生省や文部省の求めてくる高等な職業教育上のカリキュラム（たとえば資格者養成コースなど）によって変容してきているといえる。ただ毎朝の二十分間のチャペルが形をもってそのような動きに抵抗するかのようにつづく。それは平均百名弱の出席者ながら新島の精神に協力したミス・デントンゆかりの栄光館とオルガンにしみついた執念を生かす学内共同体的実践であるが、しかし、それとても学長と歴代宗教主任の「十字架」にしかすぎないということであって

はならない。数名の教職員と若干の学生がこれにたえず参加している意味は考えておかなくてはならないことではないだろうか。さらに、また共学の同志社大学の中においては、今日も学生たちと任意に専門を離れて聖書研究会を開いている教授たちのあることを聞く。またあの封鎖のさ中にあっても、旧神学館（クラーク館）を物理的な破壊の手から守った教授もいた。女子大学の中ではそのような緊張が表面化しないがため、かえって歯止めのない結果を招きやすいのではないかということも危惧される。そこでわたしたち教職員や学生諸君がひとりでも多く私立同志社の意義を教育研究と国家政治との厳しい関連からして、十分に理解し、自由と平和のとり得としてのキリスト教主義同志社を再評価してゆかねばならぬ時だと思ふ一人である。

結語 いかなる教育実践も、その中で学生が何を求めているか、ということは無視しては考えられない。しかし、今日の接する限りの学生は、心の安らぎを異常なまでに求めている。単なる形に走らない宗教教育の諸プログラムは、前向きに検討されてしかるべきである。つまり、これを立案する者の信仰主体が、時代の挑戦の中で、実存の深みから今や求められているのではないだろうか。

すべての人は多かれ少なかれ宗教的生を生きているとわたしは思う。総長をはじめ同志社精神をここに深めんとしている一同が、「宗教」、とくにここでは聖書の宗教の広き意義を評価されて、実践性の要請に答える宗教教育をなし、倫理的、社会的にも高度な人格と学園を再建設することを愚見ながら願うものである。

(女子大学助教授)

同志社におけるキリスト教主義教育の現状と問題点

— 女子中・高の一隅から —

西村幸郎

なるほど 「毎朝の礼拝と週一時間の聖書の授業だけがキリスト教主義教育のすべてではない」とよく聞かされる。「なるほど」と思う。キリスト教教育の領域で考えても、キリスト教主義教育の観点からいっても、そうだなと思う。だがその後で、いつも、この問に続くはずの答えをあまり聞かされたことがないことが気にかかりはじめた。そこで、たとえば「誰が・いつ・どこで・どのように」やるのかと問い返すと「みんなで・毎日のいろいろな教育の場・各自の持ち味を生かして」やるのだという答えが返ってくるようになるだろう。教育は生きものだから、教育共同体として「みんなで」行なうのだとは実にうまい。しかし「みんな」とは都合よくできてゐる。誰もやらないということも含み得るのだから。

現場に切り込んで、その問いを更に深化し明確にするはずの問いかけが、現実には現場を切り棄てる問の出し方になってはいないか。提起されている問を正面から受けとめねば、と思う。

みんな 女子中・高では礼拝の話は「みんな」で分担することになっている。女子中・高の良いところは、原則的に「教育はみんな」でやるのだ」という姿勢が教職員の間にあることであろう。

なかには、私の持ち味は礼拝の場では発揮できないといわれる方もなくはないが。生徒も年間十回程度は担当する。後述する修養会の報告礼拝といった形式で。

だが問題がないわけではない。年間中高合わせて四百回以上に及ぶ礼拝回数だから先生方の好意と意欲だけですべてが満たされるというわけではない。ある先生の分担は年間二十回をこえることもある。「みんな」の問題が「一部」にしわよせされることもある。「一部」で担いきれなくて、市内の牧師に応援していただいている。週三回、年間九十回近く。みんなの負担が軽くなるばかりか、一学期間継続して応援していただくので礼拝に一つの筋が通る。この点は、かつてミセス・ロイド師が評価されたよい面である（「学校での礼拝」本誌11号）。それに話の鮮度の落ちないことがよい。学校としては怪我の功名というところか。またキリスト教主義教育は学校内で完結するものでなく、教会教育とのつながりの中で位置づけられなければならないと考えるなら、その点からも評価されてよいだろう（学校と教会の関係については今はこれ以上ふれない）。

教育の問題 しかし援助者に筋を通してもらうとは何事かとお叱

りを受けるだろう。恥ずかしながら女子中・高には「礼拝のカリキュラム」がない。それを作ると話の担当者が減少することが予想されるからか。この辺りに教師集団の問題が隠されている。「みんな」の課題が「一部」の問題となり、「私たち」の問題が「ひと」任せになり、毎日のプログラムにカリキュラムがないという現状。

それにも拘わらず、私は礼拝が少なくとも教育のプログラムとして教師集団によって共に担われようとしている点を評価したい。教育のプログラムとしてといったが、礼拝の問題はそれが教育的であるか、どうかという一点にすべてがかかっているといても過言でないからだ。

礼拝の問題を手がかりにして筆をすすめてきたが、私はキリスト教主義の教育は具体的には教師と生徒が共に学んだり、活動したりする共同作業の中で、一人の人間であることの重さに共に目醒めて行くプロセスではないか。目醒めた人間として全的に解放されることを目指す共同作業ではないか、と考える。そこで、相互に目醒めた人間となるためのプログラムの創造が求められる。その際肝要なことは、そのプログラムが教育としての有効性を持ちえているかどうかということだ。

生徒の自主活動 生徒はどうか。生徒会に宗教部がある。各クラスから二名ずつ選出された生徒によって構成されている。部員は礼拝サービスと呼ばれる奉仕活動のほかに、募金、献金、慰問等の企画から、これらのプログラムへの一般生徒の参加呼びかけなど、実に多彩によく活動している。特記すべきは修養会であろう。中学二・三年、高校一・二年、高校三年の三つの修養会はよく練られた

計画に基づいて毎年実施されている。いうまでもなく顧問の先生と学校の宗教部の先生方の適切な指導によるものだが、高校生ともなると教師の欠けたところを補ってくれるくらいである。参加者は、学校内ではなかなか口に出せないことだが自分たちが最も話し合いたい問題について話し合えるのが嬉しい、と言う。

クリスマス礼拝として守られるクリスマス・ページェントでは、生徒会全体のバックアップのもとに、ページェント企画委員と宗教部員よりなる実行委員会の指導によって全校生がキリスト教教育のプログラムに参加する。これはキリスト教教育の経験学習として多角的にもっと評価されてよいことだろう。創立者永眠記念日の早天祈祷会後には、本校からの参加者（例年約百二、三十名）が芋粥と一緒にいただく楽しい交わりの場が用意されているが、昨年ごろから前日の準備に生徒たちが自主的に参加するようになってきている。生徒会のクラブの一つである聖歌隊は、年間六、七回のさんび礼拝をはじめ、毎朝の礼拝で奉仕しているが、その活動ぶりには頭が下がる。またYWCAも地味ながら奉仕と研究の活動を自主的にすすめている。

これらのすべての活動の背後に教師のフォローアップと生徒の自主性を育てようとする配慮ある指導のあることはいうまでもない。このような教育活動は礼拝の担当に比して少しも劣るものではない。しかしこれも「限られた一部」によって担われているとなると、キリスト教教育はあるがキリスト教主義教育は不在であるということになりかねない。

宗教部 現状では、学校の宗教部の先生方が中核となって、修養

会、クリスマス・ページェントをはじめとする毎日の生徒の自主活動の指導とフォローに休む間もなく尽力されている。学校の宗教部の主な責務は年間を通しての全学のキリスト教教育のプログラムとそれらの推進と指導、特に礼拝の計画と実施にあるといっている。これらすべては、生徒の理解と積極的参加なしには実りない仕事であるが、生徒と教師の関係は年々よい方向に育てられてきているといっている。

ほかに、学校の宗教部が担当するプログラムとして中一全員参加の組別一泊修養会や、中一父母修養会がある。前者は新入生に同志社のキリスト教主義教育を生活経験を通して理解させようと二十年近くも続けられてきた学校の大切な行事の一つである。また後者は教育は家庭との協力関係を抜きにして考えることはできないという意味から、ハードスケジュールの中でここ七年ほど続けられてきた。参加者からは同志社教育を理解するよい機会として喜ばれている。

なお学校の宗教部は、教員によって選出された主任、副主任の二人だけで構成されているのであるから、この任に当たるのはかなり激務である。みんなの課題が宗教部まかせになっていることもその一因であろうが、この宗教部をバックアップするものとして各学年より一名ずつ出される宗教教育委員会がある。キリスト教主義教育の全般的な検討とキリスト教主義教育が宗教部と聖書科の請負いにならないための機能を担わせられているといえよう。といって、量が質にまた質が量に転化する方向を教育のプログラムの中で確立しえていないままに、日ごと試行錯誤を繰り返している実状をとりえなおすだけでも大仕事である。

同志社における 全同志社の問題に具体的に言及する紙幅を持たないが、組織と制度と経営の面で、キリスト教主義教育がどのように具体化されているかを問うことが最も重要でありながら、最も欠落した部分となっているのではなからうか。ほかに我々の学校にはさまざまな問題があるが、それらは単に創立者の遺志を強調するだけで解決するものではない。なぜなら、現状は、百年に近い年月を経たことによって、創立者の精神が忘却され、歪曲され、いたずらに形骸化してきたという歴史の風化作用によってもたらされたというだけではないからだ。新島襄が同志社を創立した時代は、あつて、社会全体のめざすべき方向を示すことができた。一九世紀のロマンチズムの成立していた「幸福な時代」であった。が現代は「個人が社会全体を代弁して何事かができるような条件を失った時代」である。教育もその外にあるわけではない。

従って「今日の教育の問題」に同志社女子中・高としてどのように取り組むかに、我々のキリスト教主義教育のすべてがかかっている、と私は考えている。

アゴラがほしい。答えはその問いの中にすでに用意されているといえる。とすると、どのように問いかけるかということこそ問題であろう。その問いを鮮明にし、更に深化するために広場がほしい。キリスト教主義教育に対する問いかけは、各校でさまざまな角度と深みから掘りおこさされているが、それらが互いにかみあわないままに放置されているところ同志社としての問題があるのではないか。それらの問いかけが我々の共有するものとするために、アゴラを造りだすことが緊急の課題ではなからうか。教育に対する国家の管理と統制が強化されつつある時だけに、一層その感が強い。

(女子中高教諭・聖書)